

氏名	谷地 畝 晶子
ヨミガナ	ヤチウネ ショウコ
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博音第243号
学位授与年月日	平成26年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 ヨハネス・ブラームスの「低声のため」の歌曲における一考察—その音楽的特徴と低音に求められる役割— 〈演奏〉 Brahms op.91 Zwei Gesänge、Gestillte Sehnsucht、Geistliches Wiegenlied

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	寺谷 千枝子
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	佐々木 典子
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	檜山 哲彦
（副査）	東京藝術大学	名誉教授		伊原 直子

（論文内容の要旨）

本論文では、ヨハネス・ブラームス(1833～1897)の「低声のため」に作曲された歌曲に焦点を当てた。ブラームスの歌曲作品は、アルト歌手にとって非常に重要なレパートリーである。それは、アルト独唱と男声合唱による作品53<ラプソディ>やアルトとヴィオラのための作品91<<2つの歌>>といった有名な作品があることがひとつの理由であると言える。また、ブラームスの歌曲を演奏する際、独特の温かさ、渋さ、内面の芯の強さといったものを作品の中に感じることが多く、その雰囲気はアルトの声に合っているようでもある。

しかし実際は、初期や中期の歌曲作品では、原調の音域は高めに設定されているものが多く、「低声のため」の歌曲は、創作時期の後期において多く見られている。一般的に歌曲演奏の際は移調が認められており、ブラームスも歌手に合った移調を容認している。その中であえて「低声のため」の歌曲を作曲していたことに、ブラームスの意図があると考えられる。そこで「低声のため」の歌曲に見られる音楽的特徴の考察により、これまで漠然と感じていた低声に求められた役割を明らかにし、アルト歌手としてそれらの作品を表現する際のひとつの指針を提示することが本論文の目的である。

第1章では、ブラームスの歌曲に見られる特徴を俯瞰する。1. 民謡とのかかわり、2. 詩人の選択について、3. 歌曲集としてのまとめ、4. ブラームスの器楽作品とのつながりに関して述べ、ブラームスの歌曲作品ならではの特徴を考察する。

第2章では、ブラームスの創作に影響を与えた歌手たちについて述べる。ブラームスは女声歌手との交流が多く、彼女たちから多くのインスピレーションを得て作曲活動をしていた。その歌手たちについて、レパートリーや当時の批評などからその人物像を明らかにする。また、ブラームスとそれぞれの歌手のかかわりを含めながら述べ、ブラームスが自作品演奏の際、歌手に求めていた理想の一面を検証する。本論文の目的は、「低声のため」の歌曲の考察であるため、2人のアルト歌手、アマーリエ・ヨアヒムとヘルミーナ・シュピースについて特に重点的に述べる。

第3章では、実際に「低声のため」の歌曲の分析を行う。第1節において、作品86、作品94、作品105に含まれる計16曲の楽曲分析を行う。まず詩を提示し、その内容を明らかにしたのちに、それぞれの楽曲分析を行う。第2節ではその分析をもとに、同時代に作曲された「低声のため」と指定のない歌曲作品との比較を含めながら、「低声のため」の作品に見られる独自の特徴を明らかにする。第3節では、アルトとヴィオラのための作品91<<2つの歌>>の楽曲分析を行う。この作品は、「アルト」という指定があるとともに、ブラームスの

歌曲作品の中で唯一オブリガート楽器を伴う作品であることで異彩を放っている。そのため別途考察を行い、作品に見られる「アルトラしさ」を含めて検証する。

これらを総合的に考察し、「低声のため」の歌曲における音楽的特徴と、ブラームスが低声の音色に求めた役割を明らかにする。その一面を提示することは、ブラームス歌曲演奏の際、特に低声歌手にとって意義があると考えられる。

#### (総合審査結果の要旨)

「ヨハネス・ブラームスの『低声のため』の歌曲における一考察 ―その音楽的特徴と低声に求められる役割― 」と題された本論文は、申請者自身の声域であるアルト歌手の視点から、第一章でドイツ民謡、詩人の選択、歌曲集としてのまとめ、器楽作品とのつながりなどを探りブラームス歌曲の概要を述べ、第二章ではブラームスに影響を与えた重要な女性歌手たちに演奏者としての深い関心と共感を寄せる。

第三章ではさらに低声のために作曲された3つの歌曲集と「アルトとヴィオラの為の2つの歌 作品91」の楽曲分析を軸に、「低声のため」の歌曲の独自性や表現方法、アルト歌手としての役割を追求した。

申請者は本研究を通し、ブラームスの音楽の持つ内面性や深淵を、低声の音色や表情でどのように表現すべきかを提案、丁寧な分析を極めて読みやすい文体で示している。

音楽家の視点からの実践的な研究として高く評価できる。

学位演奏は「Terese」をはじめとするブラームスの作品を8曲、リスト3曲、ブラームスのアルトとヴィオラの2曲、最後にシェーンベルク6曲を演奏した。

ブラームスは端正に格調高く、リストは華やかにおおらかに、シェーンベルクは旋律と詩が一体となって語られた。

いずれも安定したテクニックを基に、恵まれた豊かな温かい声でのびやかに演奏された。高いレベルの演奏として評価できる。

論文、演奏ともに博士学位授与にふさわしいと判断する。